



清教学園 創立 75 周年

「敵のために祈ることで」

2026 年 6 月

聖書科 岡本 拓也

しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

(マタイによる福音書 5 章 44 節)

河内長野教会の会員である児童文学作家の大谷美和子さんが清教学園中学校創立の出来事を物語にした『青春輪舞—清教学園物語』には、河内長野教会が開いた清教塾に通う中学生たちが祈りと行動によって塾の教師や教会の牧師を突き動かし、中学校設立という奇跡を起こす様子が描かれています。生徒も、教師も、教会の人々も、困難が立ちはだかる度に祈りを重ね、歩むべき道を求める姿が印象的です。

『青春輪舞』は主人公の山村耕平が総合学園設立の志を抱いて幕を閉じます。清教学園高校 2 期生の父から聞いた話ですが、山村耕平のモデルとなった中山昇先生は、毎日のように早朝から河合寺のある山に登りお祈りをされていたそうです。そのお祈りの中で、この総合学園設立を願い、どうか良い場所をお示してくださいと祈って目を開けると、雲の間から光が差し込み、向かいの山の頂上を照らしました。1967 年、そこに清教学園は移転し、現在に至ります。

私たちの学校は、祈りによって建てられたのです。

祈りとは、このように人を支え、励まし、突き動かす力を持っています。皆さんも、何か大きな壁や困難を乗り越えようとする時、もしくはクラブ活動で大会に出場した時などは、神様に祈ることがあるのではないのでしょうか。

私たちの祈りの多くは自分や仲間のための祈りです。しかし、イエス様は「自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われます。

敵のために祈りなさいと言われてよく聞くのが、

「(敵) が自分の罪に気付いて悔い改めますように」

であるとか、

「(敵) を正しい道に導いてください」

といった、敵の変化を願う祈りです。これは、結局は相手が改心して自分が平和になることを祈っているため、敵のための祈りとは言えません。



生徒自治会で祈る生徒たち (1950 年代)



敵のために祈るからには、敵が幸せになることを祈らなければならないでしょう。敵の幸せを祈るためには、まず敵が何を考え、求めているかを知らなければなりません。敵の気持ちになるということです。敵の生まれ育った環境、人間関係、敵が触れるメディアや情報。そういったものをよく調べ、観察し、その声を聞いた上で「なぜ敵がそのように考え自分を迫害するのか」を考えなければなりません。これには、偏見に基づくことなく情報を集め、対立する意見を冷静に受け止め、読み解き、分析し、理解しようと努力する力が必要です。相手の気持ちになって初めて、その人の求める幸せが何かわかります。おそらくその時、相手から見ると自分こそが敵であったことに気づくのではないのでしょうか。

そこまでくると、相手の間違いや思い込み、自分の悪いところに客観的に気づくことができ、共に歩むべき道を求めて祈ることができるようになります。それが「自分を迫害する者のために祈る」ことなのではないかと私は思います。

共に歩むべき道を求めて祈るとすれば、それは果たして「敵」なのでしょう。イエス様は、敵のために祈ろうと努力することで、敵味方の枠組みを越えて隣人となる道を示されているのです。

清教学園のめざす人間像の一つに「隣人と共に平和を築く」があります。ここでいう「隣人」が仲間のことであるならば、敵を暴力的に排除して仲間の利益を最大にすることが平和であるとする、虚構の平和を目指す現代の大国のありようと何ら変わりません。

真の平和を築くためには、敵味方という枠組みを超えて隣人となり、共に平和を目指さなければなりません。そのために私たちは「自分を迫害する者のために」祈り続けなければならないのです。

世界中が自己中心主義に陥り、排他的になって紛争や戦争が止まない現代だからこそ、私たちは清教学園の原点を思い起こし、自分を迫害する者のために祈ることができるように学び続けたいと願います。



大谷美和子『青春輪舞～清教学園物語～』（電子ブック）は [こちら](#) からお読みいただけます。